講演題　：　携挙・再臨と最後の神殿

終末論はキリスト教の中でも大切な教理であり、聖書で読み解く事の出来る将来的な事象の最後の部分で、

信仰者に与えられている大切な希望でもある。　近年キリストの十字架による贖いの福音を知って救われさえすれば、後は天国に行けるのだから大丈夫、と大雑把に福音を捉え、学びを深めたり、自分達の持っている

将来の希望についてはっきりと説明できないキリスト者が増えている。　夏の修養会でこの課題について

話さなければならないと判って、最初は教派による終末論の違いについて説明しようかと考えていたが、日本の教会でも、一般的な終末論に対する理解さえ怪しい様に見受けられたので、福音的な教会で一般的に教えられている大まかな終末論についてまとめる事にした。　流れとしては携挙（主の空中再臨とも言う）があって、艱難期、そして主の再臨（地上再臨）があり、地上での千年王国と言う流れが一般的である。　その後に新しい天地（新しいエルサレム）が立てられる。　混乱しやすいのはキリストの空中再臨と地上再臨と言われて

定義されている部分がごちゃまぜになっていたり、艱難期のいつ頃に携挙が起こるかで色々な意見があるようだが、艱難期の前に教会の携挙が起こると捉えている教派が多い様である。　細かい違いはとにかく、再臨

信仰は救いの完成の信仰であり、もしこの信仰が崩されれば、創造の信仰も、十字架と復活の信仰さえも全て空回りする程大切な意味を持つもので、再臨に対する正しい理解は必要なのです。　内村鑑三もこう言っています。「十字架が聖書の心臓部であるなら、再臨はその脳髄であろう。再臨なしに十字架は意味をなさない。したがって、我々クリスチャンは再臨の信仰の立場に立って聖書を通観する必要がある」。　私もその様に

感じましたので整理する意味で、まとめて見る事にしました。

1．全ての始まりとしての携挙（主の空中再臨）

初代教会の信仰は明日にでも携挙が起こってもおかしくはないと言う視点で、信仰の完成と言う課題を語り、

携挙に備えて聖化きよめを求め、迫害にも困難にも耐え忍びながら、“その日”を待ち望んでいたと言えるでしょう。　聖くなければ神と合い交えるどころか、神を見る事さえ出来ないと御言葉に言われている通り、

ここまで強くはっきりと聖めを求めるのは、携挙されるべき存在として自覚があったからで、携挙は神による選択の結果で、私は残されるかも知れないなどと言う思いは初代教会にはなく、むしろ主に在って死んだ者さえ復活してあげられると言う表現（テサロニケⅠ4:15～18）は確信に満ちた物です。　それ以上に、これを持って励ましなさいと言えるのは、よっぽど強くはっきりと確信していたと思うのです。　近年携挙を題材にした映画が度々出て来ますが、信仰が弱く残されてしまった人が艱難の中でしっかり生き抜いて行く姿が描かれています。　しかし、初代教会の人達がそんな映画を見たら、きっと「私達には考えられない」と言うでしょう。　熱心に主が来られるのを待ち望み、一瞬にして天に挙げられる奥義をパウロが新約聖書独特の釈義として書いている事にもまた興味深い部分があります。　続く患難期において、頑ななユダヤ人が救われる為に

主の怒りが注がれると記されているのですが、主を信じる者は、その患難からも逃れられると言う恵みを頂くのです。　これは現実です。　私は携挙されなくても良いと思っているクリスチャンがいるとすれば、それは

恐ろしい信仰の堕落です。　現実に携挙も再臨も実感として信じていないので、自分がニコラス・ケイジの様に残された艱難期をかっこよく生き抜いて行けると思っているのでしょうか。　十字架の業は私達が不必要な

困難から救い出される事も、目的であったのではないかと思います。　救われている信仰者は、携挙されて

当然だ、携挙されたい、という願いを持って、毎日主との交わりに励みます。　忙しい毎日に流されて、気が付くと携挙されなかった、それでも良いと言うのは、十字架の業を無駄にしていると言えるかも知れません。

２．患難時代

少しだけ患難時代についても述べたいと思います。　一般的に7年と言われる患難期は、ユダヤ人達の救いの為に、神が最後の機会として与える患難であると捉えられています。　艱難期を2つに分けて、後半の3年半を大患難期と言う説も多いですが、艱難は終わりに向けて激しくなっていくようです。　ユダヤ人の救いと深く関係があるのは、患難期の真ん中で、「荒らす忌むべき者」と言う表現が出て来ます。　その人物が聖なる所に立つのを見たら、とあるので、ユダヤ教の神殿が立てられていると多くの人が考えているようですが、

私は個人的にユダヤ教の神殿である必要はないと思っています。　神殿ではなく聖なる所にと書かれているからです。　ともあれ、自分達が神聖だと思っていた何かを、この人物が踏み荒らす事によって、ユダヤ人の

頑なさが徹底的に砕かれ、非常な悲しみを持って悔い改めに導かれると言うのです。　選民を救いたい主の

御計画の故の患難期ですが、頑なな異邦人も救われるのでしょうか。　福音が全世界に伝えられてと言う節が

出て来ますから、患難期にも何らかの福音宣教が継続されているようです。　どちらにしても、患難期の目的はユダヤ人にとって神の御国の地上での回復、異邦人にとっては罪の赦しを受け取る福音による神との関係の回復が成されるためと言う事になります。

３．キリストの再臨と千年王国

主が雲に乗って、誰の目にも明らかに来られるのは患難期の最後、千年王国の王として地上に帰って来られます。（マタイ24:30～31）　雲に乗って、などと言いますから、孫悟空か何かを連想してしまいますが、どうやら表現の問題の様で、「雲」という名詞の前にある**前置詞の原語**を調べてみると、以下のようなことがわかります。　マタイ24:30は「エピ」(**έπί**)ですが、その並行記事のマルコ13:26とルカ21:27「エン」(**έν**)、
マタイ26:64「エピ」(**έπί**)ですが、その並行記事であるマルコ14章26節では「メタ」(**μετά**)　そして黙示録1:7節では「メタ」(**μετά**)が用いられています。　「エピ」(**έπί** )は、本来、「～の上に座して」という意味。
「エン」(**έν**)は、本来、「～の中に、～に包まれて」という意味。　「メタ」(**μετά**)は、本来、「～と共に、

～を伴う」という意味。　上に掲げた聖書箇所では、前置詞がみな異なっているにもかかわらず、新改訳、

新共同訳、口語訳が、一様に「雲に乗って」と訳しています。　キリストの再臨のイメージは、「雲の上に

座して」と言うより「雲の中に」「雲に包まれて」「雲と共に」「雲を伴って」という表現の方が神の栄光に包まれてと言う感じになります。　雲と言うのは神の栄光と隣在を現わす表現にも使われています。　手短に

言うと、主ご自身の御栄光と共に、地上に主が帰って来られるのです。　もう一度地上で救われた選民である

ユダヤ人と、十字架によって神の子とされた異邦人が、主に在って一つにされると言う約束も成就されます。

地上に普遍的平和がもたらされ、旧約新約で神が約束されたすべての契約をこの千年王国の内に成就されます。最初に地上に来られた時に、王としてではなく僕として仕えられた主も、ここで王として君臨する事に意味があります。　メシアの王的職務について、現時点でおぼろげながら、部分的に、もしくは霊的な象徴として

語られている事が、現実として成就する事になります。　天と地が事実上主の主権によっておさめられ、千年の間、その輝かしい御臨在と栄光の御臨在によって満たされ、私達も主と共に治めると記されている。　この

千年の支配の後に、竜と呼ばれるサタンが永遠の火に投げ入れられ、主による最後の裁きが行われます。

４．新しい天地と最後の神殿

全ての神の働きの最後は新しい新天地、新しいエルサレムにまで及びます。　ここまで来て思う事は、聖書の

霊感は時を超え、場所的制限も超えて、私達をとんでもない所にまで連れて行く事が出来る。　聖書の全てが

成就し、新しい新天地に至る所迄、ヨハネを通して幻の中で見せ、私達に掲示して下さる神様の不思議さに

脱帽しない信仰者はいないだろう。　神のスケールの大きさは、この都は12,000スタディオンの正方形、現代の大きさに置き換えると2200㎞の超巨大な都市であります。　私の住んでいるクルージュからこの会場まで1500㎞ですから、この新エルサレムの一辺にも足りません。　18時間も運転して。!!　この新天地は聖書の結論でもあります。　主にとって、もっと大きな建物を作る事など、何の問題もなかったでしょう。

聖なる都、新しいエルサレムには神殿はありません。なぜなら、「万物の支配者である、神であられる主と、小羊とが都の神殿だからです。」(22節)。かつての聖所(幕屋、神殿)は、神と人との会見の場所として備えられていましたが、新しいエルサレムにおいては、そこに、神と人とが常に共にいるので聖所は必要ないのです。

黙示録の最後の所で与えられるこの最後の神殿の啓示は、私達に神様との関係の極めて基本的な、そうであってなかなか理解出来ない大切な事を物語っています。　これが聖書の最後に出て来る神殿です。　モーセの幕屋やダビデの幕屋、ユダヤ人たちが誇りにしたソロモンやヘロデの神殿、自分達の精神性の拠り所として

建物や能力、組織や人間など、私達は色々な物に神を投影して、時々神ご自身が私達に何を求めているか

思いにも留めない時が良くあります。　神ご自身が神殿としてあがめられる信仰の回復が必要なのでしょう。

また、神は御顔を向けて、私達の人生にご介入されたいと願っておられます。　光として都を照らす主ご自身の御顔は、まさしくユダヤ人たちが祝祷の中でいつも語っていた「主の御顔があなたを照らす様に」と言う

祈祷文そのものの様な響きがあります。　主ご自身と顔を合わせて生きるのは、何かアダムが罪を犯す前の

エデンの園の様ではありますが、全ての御業の終わりに、主が約束して下さっているのはその様な回復です。

「顔と顔を合わせる」親しい交わりを通して神の栄光が輝き始めます。このことは、私たちが罪の贖いを経験した後、さらに一段高いレベルヘと進む必要がある ことを教えています。神は私たちを、ただ罪から自由にするためだけに贖われたのではありません。神は、私たちが神との親しい交わりを持ち、顔と顔とを合わせて神を知るために、キリストを通して、私たちを新しく創造してくださいました。それが完全に実現する永遠の御国に向かって、私たちは今も旅をし続けているのです。

日々の礼拝(主日の礼拝)において、本当に求められているのは、主の御顔の臨在です。御顔を仰ぎ見ることが礼拝の目的であり、私達が創造された真の目的です。限りなき優しさと慰めに満ちた主の御顔の麗しさ、そうした主の御顔を仰ぎ見ることが出来るなら、すべてのものが色あせたものとなります。目に見えるものに動かされることはありません。ブレルことのない信仰を持って生きることができます。それゆえ、私たちは、この地上の褐藻の中に在っても、主ご自身が共にいて下さる事を自分の聖所にして、主ご自身の御顔をいつも慕い求める者となれるよう祈りたいと思います、主によって贖われた者たち、主にあるすべての者たちの究極の存在目的は、まさにその一事にあるのですから。